

水中写真家という

不定期
連載

生き方

Vol.05

The interview with underwater photographer



気持ち良さそうに休憩するサザナミフグに、ちいさな子供たちが悪戯をしているようで微笑ましかった

海の世界に魅せられて、写真という表現方法でその神秘性と美しさを追求することを生業にしている希有な人たちがいる。水中写真家という職業。水中という制約の多い世界で時には危険と隣り合わせになりながらも、彼らが海中という舞台にこだわる理由とは？ 独自の世界観を持つ水中写真家たちのインタビューを通し、そのバックグラウンドと思想に迫る話題の連載。第5回目は、30代という若さながらすでに数々の写真集を世に送り出してきた人気の水中写真家・古見きゆう。挫折と失敗を繰り返してもなお不屈の精神でチャンスをつかみ取る、1人の男の素顔に迫った。

文・人物撮影 曾田夕紀子

絶対に諦めない男

古見きゆう

——機内アナウンスの予告通り、着陸準備に入った機体はじょよに高度を下げ始めた。海外での撮影取材を終え、成田へ向かう機内で、古見きゆうは得も言われぬ恐怖と戦っていた。激しい頭痛、著しい体力低下、全身の倦怠感、握力の低下……。数か月前から身体がちが不調をきたしていた。日頃から前向き思考を心がける古見でさえ、そのうち治るだろうだなんて高を括れなくなるほど、その嫌な兆候は目を追うことに深刻度を増していた。とりわけ飛行機での移動の際、気圧変化に伴って生じる手足の先がビリビリ、ザワザワとする感覚には肝を冷やした。急な高度変化を伴う離陸時と着陸時には、全身に冷や汗をかき、死の恐怖さえ頭をよぎる。その恐怖に対抗すべく、機内では睡眠薬の力を借り、寝てやり過ごすのがいつしか古見の常套手段になっていた。

不調の正体は、減圧症であった。戦後70年を迎えた2015年に上梓した写真集「TRUK LAGOON トラック諸島 閉じ込められた記憶」。その作品撮りの追い込みのため、足繁くミクロネシアのチューク（トラック諸島）へ通っていた頃のことだ。第二次世界大戦中、米軍のトラック大空襲で沈んだ日本の船、40隻余。静かに海底に横たわるすべての船を写真に収めるべく、約9年の月日をかけて古見は撮影を続けていた。水深50mに沈む船に1日3本潜ることもあれば、激流が襲う水深75mの沈船を目指すこともあった。けっして安全管理を怠っていたわけではない。減圧用に酸素濃度の高いタンクを用いたり、数十分もの減圧停止を丹念に行ったり、できる限りの安全策は投じてきたつもりだった。しかし、どこかできつと無理が重なってしまったのだろう。次第に身体は悲鳴をあげ始めた。「もしかしたら減圧症ではないか？」という不安が頭をかすめながらも、隙間なく埋まっていた取材の予定をキャンセルするわけにはいかないと、病院へも行かず、だましまし潜り続けた。そしてある時、身体がついに限界を超えてしまった。立つて歩くことすら困難になり、すべての予定をキャンセルして治療に専念することになった。そして、2か月間の治療のあと、また懲りもせず古見は海の世界へと戻っていった。

断つておくが、この話はけっして減圧症になるまで身体を酷使したことを賞賛する美談として、紹介しているわけではない。ただ、「水中写真家・古見きゆう」の覚悟の一端を知ることの出来る、1つのエピソードであることは紛れもない事実だろう。「減圧症に対して僕は強いと思っていたし、実際強いと思うし、自分だけは絶対にならないって思ってたんです。だから、とにかくがむしゃらに潜っていたし、仕事の依頼も全然断らなかった。もともと僕らの場合、常日頃からギリギリの潜り方はしているわけですよ。だって、やることがレジャーではないですから。作品撮りであれ、

命をかけて撮るということ。

雑誌の仕事であれ、最大限頑張りたいと思うから、そこで無理をしないといえればやっぱり嘘になる。そんな潜り方しちゃダメだよっていう人もいるけれど、それはレジャーだからでしょ？ って。こっちは命かけて潜ってるんだ、なんで命かけてやってる人間にそれはダメだなんて簡単に言えるんだって思う気持ちはあります。ただ、あれからは生活習慣も見直して、より安全な潜り方を意識するようになりました。命はかけられるけれど、海で死にたい訳ではないから」

じつさい、チュークで撮影した沈船は、レジャーダイビングではアプローチできないものが多い。例えば、水深75mに沈む船「葛城山丸」の撮影は、欧米系の現地サービスに何度も断られながらも粘り強く交渉し、特別に連れて行ってもらって実現したものだ。激流、深場、いまだに人骨が転がる、狭くて暗い船内……。得体の知れないガスが溜まった不気味なエアドームに入ったり、1m幅もないような場所を一人で進むこともあった。そこには、減圧症のリスクだけでなく、下手をすれば死に直結するあらゆる危険が潜んでいた。

海の魅力は？と問うと「魚がいるから」という答えが淀みなく返ってくる。そんな根っからの魚好きである古見にとって、沈船はもともと被写体としては興味の対象外だった。チュークでの沈船撮影はいわば古見にとって異色のテーマであったし、撮影中に「楽しいと思っただけは1度もない」という。それでも危険を顧みず長年撮影を続けてきたのは、人知れず朽ちていく沈船を前にしたとき「記録として残さないといけない」という使命感にも似た強い思いが沸き起こったためだという。

「ひとつだけ言えることがあるんです。俺、絶対に諦めないよ」
志や目標のためならば、苦勞も努力も危険も泥臭いことだってまったく厭わない。誠実で義理堅く、不器用なまでに一本気。そんなまっすぐな男が撮る写真にどうしようもなく惹きつけられる人が多いのは、それが言葉通り、命をかけて撮られたものであるからかもしれない。

物心ついた頃からサッカーが好きだった。中学生になると、Jリーグ加盟クラブの下部組織であるユースに所属し、将来は当然、プロのサッカー選手になるものだと自分で思っていた。しかし、17歳の時に、足関節内側じん帯損傷、椎間板ヘルニアという大怪我を立て続けに負ってしまう。それが選手としては命取りになり、最終的には「サッカーはもう諦めた方がいい」とコーチから引退を渡された。そんな失意のどん底にいた時、一人でふらりと立ち寄った熱帯魚店で、サッカーに代わって情熱を傾けることのできる新たな宝石を見つけた。



Profile
ふるみ きゆう

東京都出身。本州最南端の和歌山県串本町にて、ダイビングガイドとして活動したのち写真家として独立。現在は、東京を拠点に国内外の海を取材で飛び回り、海の生き物たちの姿や美しい水中風景などを撮り続けている。海の生き物たちのコミュニケーションをテーマとした写真集「WA!」(小学館)、アオウミガメ「WAO」の成長物語を綴った絵本のような写真集「WAO! 海の旅人ワオの物語」(小学館)、インド洋から南太平洋、日本海や南極海など9海洋の海中風景を取めた「THE SEVEN SEAS」(バイインターナショナル)、空襲によりチュークの海に沈んだ日本船の全40隻余りを取めた「TRUK LAGOON トラック諸島 閉じ込められた記憶」(講談社)など著書多数。

水中写真家 という 生き方 古見きゆう Vol.05

ラッキーは存在すると思うけど、「持ってる」っていうのは違うと思う。運を引き寄せる方法が1つだけあるとしたら諦めないことだっと思うんです。何回もチャレンジすること。それしかない。

チンアナゴとテンスの幼魚が挨拶を交わしているようだった



古見きゆう
生き方 Vol.05
水中写真家
という

知床の流水は下から見上げるとじつに神々しい。サメのオブジェのような迫力ある流水に出会った



この写真を撮影できたことによって、「WAO!」のストーリーが完成した。思い出に残る一枚



チュークの中でも水深が深く撮影は非常に難しい駆逐艦「追風」

「ゴールデンバタフライフィッシュとかさ、クイーンエンゼルとか、すごくきれいで。これはすごいと思って、その場で水槽セットを買って熱帯魚を飼い始めました。子供の頃、友達の家とかでグッピーとかネオンテトラを飼っているのを見ても、正直全然きれいだと思っただけでなかったし、興味なんてなかったのに。そこで見た海水魚はめっちゃきれいで輝いて見えたんですね。人工的じゃない色彩の美しさに惹かれたのかな」

ぽっかりと空いた心の隙間を埋めるように、古見は海水魚の魅力にのめり込んだ。ダイビングインストラクターになれば、毎日、海で美しい魚たちを見ることのできる。そう考え、高校卒業後はダイビングインストラクターを養成する専門学校へ進学。体育会系で有名だったその学校（現在は廃校）で、2年間みっちりダイビングのトレーニングを積んだ。そして卒業後は、ダイビングガイドとして和歌山県の串本海中公園に就職。水中撮影機材を以前から欲していた古見は、さっそく初任給で33000のカメラとレンズを購入。ハウジングとストロボは、数か月分の給料を前借りして手に入れた。そして、毎月わずかに残るお金でフィルムを買えるだけ買い、撮影に励んだ。

「撮りたい！ ってこと以外に何も考えてなかったですね。ガイドの時はカメラを持って行きたくなかったから、朝早起きして一本潜って、昼間お客さんと2本とか潜って、夕方はカメラを持ってまた潜る。ほんとうにお金はなくって、一か月二万円生活みたいな感じ（笑）。近所づきあいとか、周りのみなさんの優しさに生かされていたようなものです」

職場である串本海中公園のダイビングパークには、水族館と研究所が併設されていた。そのため、上司には、研究者や科学者といった専門家達の姿もあった。いっしょに生き物の採集へ行ったり、フィールドワークだけでは分からない生態の知識を教えてもらったりと、海の生き物に対する知識を深めることができたことも、古見にとってはかけがえない経験だったという。

水中写真を始めて間もない頃、お客さんに誘われて応募したフォトコンテストで、イトヒキペラを取めた写真が入賞を果たした。以後、ダイビング雑誌の編集部や図鑑を制作する出版社から、時々、写真の提供を依頼されるようになった。掲載されれば、わずかがが謝礼が入った。写真がお金になるということを知り、いつの頃からか水中写真家になりたいという気持ち古見の中に芽生えるようになった。

「ガイド業に未練がなくはなかった。だって毎日好きな海に潜って、魚を見られてお金ももらえる。こんないい仕事ないだろうって。でも、ある時お客さんを連れて潜って、自分が撮りたい気持ちをもう我慢することができない！ と思ったことが

あったんです。ガイドはお客さんに海の魅力を知ってもらって、写真を撮ってもらったんです。これはもうガイドをやめよう、と」

水中写真家を志すにあたってまず考えたのは、著作のファンだった吉野雄輔氏に弟子入りすること。面識もないのにいきなり家を訪ねると、突然の訪問にも関わらず吉野氏は優しく迎えてくれた。しかし、ダイビング雑誌などで古見の存在を知っていた吉野氏からは「自分で撮れるんだろ？ だったら自分でやりなよ」と諭された。断られたのはショックだったが、それで腹を括った。水中写真家として自分の足で立つて活動していこう、と。古見きゆう、弱冠24歳の時だった。

「駆け出しの頃は、まだフィルムだったし、大変でしたよ。何をしたらいいかも分からなかったけど、とりあえず潜ろうと思って海に出られるだけ出てました。お金が続く限り。いろんな人にバカにされて、悔しい思いもたくさんした。でも、それが前に進む原動力になったんですね。サッカーでは一度自分に負けたと思ってるし、あの時は本当に悲しかったから、もう二度と諦めることはしたくなかった。みんなにどんなに笑われたって、続けてさえいけば負けじゃないですね」

車で寝泊まりしながら自費で取材を続け、出版社や新聞社にも数え切れないほど売り込みまわった。トライ&エラーの繰り返しだったが、それでも腐らずに自問自答しながら前を向き続けた。

「どうすれば自分を使ってもらえるのか、自分のやりたいことができるようになるのかっていうのも逆算して考えるようになりました。すると、だんだん自分よりの写真ではなくなってきたんです。優先順位として、まずは人に満足してもらえそうな写真を撮ろう、と。そして写真も変わって仕事も増えていった。結局その考え方は、今でもずっと染みついていますね」

水中写真、とりわけ魚の写真を撮る時に、古見が思い描く理想の写真像というものがある。古見の言葉をそのまま借りるなら「なんとなく沁みる写真」だ。「ビッグインパクトじゃなくていいんです、じんわりずっと見ていられる写真という考えですね。あいつらって、大概上を見てるんです。こうやって、ピッ！ って。カエルウオなんかも典型。穴の中に入らずと上を見てるでしょ。そういうのがなんか気になる。何見てるんだらう？ って。街を歩いている人も、物憂げな顔している人っていますよね。海の中にも絶対そういうのってあると思う。深刺しているのかもしれない、悲しみにくれているのかもしれない。そういうのを感じ取ると、ああ、やつらも生きたいに撮れないであろう驚くべきシーンばかりだ。

決定的チャンスをもにするとただ1つの方法。古見にとつてのそれは「諦めないこと」だという。例えば昨年、小笠原でザトウクジラの親子を撮影した時のことだ。限られた日程のなかで午後に出港を控えた最終日に、ようやく水中でザトウクジラを狙えるチャンスが訪れた。しかし泳ぎが速く、警戒心の強いクジラの親子は簡単に撮らせてはくれない。クジラを見つけては、船から飛び込む。それを何度も繰り返す。確率を高めるために途中からは走行状態の船から飛び込むようになった。減速しきれないボートから飛び込むと、水面を転がるような格好になり、叩きつけられた全身に痛みが走った。数え切れないほどトライを繰り返した後、出港時間が迫るギリギリのタイミングでようやく撮影に成功。最後はなんとクジラのほうからスッと寄ってきてくれたという。

「きゆうさん、持ってますね」って言われることがあるけど、それにはちょっと抵抗があった。だって俺、ぜんぜん持っていないから（笑）。例えば、あんなことを繰り返してやっとなクジラを撮れたのだから、別に『持っている』からでもないですよ。ただ諦めなかったから。あとは運が良かっただけ。運を引き寄せる方法がひとつだけあるとしたら諦めないことだと思っただけです。何回もチャレンジすること。それしかない」

自然体でありながら、どこまでもストイック。そんな古見が今、全身全霊をかけて取り組んでいる新たなテーマがある。それが、「日本の海」だ。「世界中の海を潜るようになって、日本の海を改めて面白いと思うようになりました。親潮と黒潮があって、サンゴ礁も流水だってある。世界でもそんな多様性にあふれた海ってないですよ。海外のどんな海よりも面白いって思う。日本人の水中写真家として、その魅力を伝える写真集をまとめたいと思っただけです」

北は北海道から南は沖縄まで、日本海から太平洋、オホツク海まで。日本のすべての海を対象にした作品撮りは、気が遠くなるほど壮大な物語になるだろう。その道のりは険しく、遠く、予想もできない困難だって待ち受けているはずだ。でも写真集が完成するその日のことは、不思議と簡単にイメージすることができる。古見きゆうは、誰よりも魚と海が好きで、途方もなく諦めの悪い頑固「徹な男」だからだ。

「アオウミガメを主役にした写真集「WAOー海の旅人」の物語」もそうだ。子供のウミガメ「WAO」が、広い海を旅する中でいろんな生き物と出会って成長していく物語。そこにアオウミガメの生き生きした写真が寄り添う。まるで絵本のよ

チャンスを掴むたった1つの方法。



八丈島で出会ったキビレマツカサの群れ。やはり日本の海は面白く、奥が深い（右）串本に毎年出現するチョウウオの大きな群れ（左）

水中写真家

生き方

Vol.05

古見きゆう